

闘病十年後の末病死しました。

海軍通信兵の歩いた道

滋賀県 加藤 吉 男

祖国防衛のため多くの人々が尊い命を捧げられ、私はその姿を多く見ました。私自身も生死の境をさまよう体験もしました。この事実を後世に伝えるため私は語ります。

私は大正九（一九二〇）年十一月二十九日、石川県七尾市で加藤家の三男として生を享けました。七尾市の男児尋常小学校を卒業し、昭和十三（一九三八）年満州国に渡り、南満州鉄道（満鉄）に奉職し、北朝鮮の清湊駅を皮切りに満州国の吉林駅などの駅員として勤務しました。

昭和十二年七月七日、勃発しました支那事變の關係で、隣国である満州国は日本軍への物資の輸送等重要な役割を果たしておりましたので満鉄の仕事は緊張の連続でした。

昭和十五年五月、私は七尾市で徴兵検査を受け

るため一時帰国しました。徴兵検査の結果は甲種合格でした。検査官から「甲種合格」と身体を叩いていわれた時は「よかった」と思いました。既に兄も兵役に服しており、当時の世相から軍務に服することは男子の本懐でもありましたから嬉しく思いました。

そしてこのころは支那事変の戦火も拡大し、徴兵検査を受けた人達は次々と赤紙の召集令状によって戦場へ行く時代でもありました。それだけに再び満鉄の駅員として勤務していましたが、一日も早く御国のためにお役に立ちたい気持ちいっぱい、いつ令状が来てもいいように準備しました。

昭和十六年一月十日、「舞鶴海兵団に入団すべし」との白紙の入団通知を受け取りました。そして満鉄関係の方から激励の送別会を開催して頂き郷里七尾市に帰りました。家の門口には「祝入団加藤吉男」の幟も立てられ、一月十日、入団します二人は盛大な見送りを受けて七尾駅を出発しました。既に兄を戦地に送り、三男坊の私を送る両

親の寂しさはいかばかりと感激と別れの涙が頬を濡らしました。

舞鶴海兵団に入団して間もなく選抜試験が行われ、合格した者は電信要員として一個分隊が編成され、三月、横須賀市の久里浜の海軍通信学校に入学し、通信技術の教育を受けました。厳しい教育と訓練でしたが、さすがに各海兵団から選ばされた優秀な水兵達であるだけに、負けてならじと頑張りました。

昭和十六年十一月十一日、海軍通信学校第五十七期普通科電信教程を終え、千二百人が卒業しました。私達五人は第二根拠地司令部付きを命ぜられ、卒業生は決められた配属により、途中それだけの基地で下車し別れて、最後に私たち五人だけが残りました。長崎県の橘湾に停泊している艦船に乗艦するため久里浜を出発し、長崎県の小浜温泉に向いました。

小浜温泉に着きますと、橘湾にはいっぱい軍艦が停泊していました。ここの湾内の各所からは

温泉が湧き出ている、その温度により船底に付着した牡蠣類は自然に落ちるのでここに停泊して艦船は船底の掃除をしているのです。私達五人は第二通信隊がいる「宮崎丸」に乗船し橘湾を出港、佐世保港に到着して、ここで軍需品を補給し台湾の基隆港に向いました。基隆港で陣容を整え、広瀬少将司令長官と司令部付きは、駆逐艦「山雲」に将旗を掲げて出港、比島攻撃に進撃しました。

十二月八日未明、真珠湾攻撃により太平洋戦争の火蓋は切って落とされました。十二月八日、広瀬司令官の命令により私達は比島部隊第三急襲隊となり出撃、目指す目標であるルソン海峡バタン島飛行場を急襲しましたが、抵抗は全く受けず占領することができました。守備兵はおりましたが我が軍の急襲により抵抗することなく逃走しました。正に無血占領となり、参加した兵隊一同は喜び会いました。この時の我が方は、僅か一個小隊の小人数で急襲に成功したのです。

さらに十二月十日にはカミギン島を攻略占領し

ました。フィリピンには数多くの島があつて、パタン島もルソン島の北部に点在する島々です。島の重要性を考え急襲しました。カミギン島を占領後はルソン海峡の敵潜水艦の掃蕩作戦を実施し、敵軍に脅威を与え、台湾の基隆港へ引き揚げました。

基隆港で軍需品や食糧を補給し、再び十二月七日、フィリピン攻略の陸軍第十四軍の主力部隊が乗船する輸送船を護衛する第三護衛隊となり、旗艦「山雲」以下水雷隊、掃海隊、駆潜隊、砲艦隊、哨戒隊、持設艦隊と二十七隻が順次出港、互いに帽子を振り合い別れを惜しみました。

途中、高雄港を出港する第一輸送船団と、馬公軍港より出港する第二輸送船団、それを護衛する第一護衛隊及び第二護衛隊が合流して輸送船団七十三隻、護衛艦艇六十一隻、合計百三十四隻がバシー海峡を進撃する姿は見事なものでした。当時の日本軍最強の姿を誇示したもので、これだけの船団艦艇の進撃はこれが初めて最後であつたらう

と思います。

この時期は緒戦で制空権も制海権も日本軍にあったから堂々の進撃が出来たのです。私達電信兵はこれだけの艦艇を統括するため寸時も油断が出来ず、交代で僚船などとの交信を続け、司令に報告をせねばなりませんでした。

フィリピンのリンガエン湾を目指しての航行中、十九日、二十日は風速二十メートルの強風が吹き荒れ、作戦に支障が出来てはと、艦内に「敵前上陸の見張所を設置せよ」との命令があり、その準備が大変でした。波浪が高く、大揺れする中で作業で、器材の組み立てと強風から守るために大変な作業でした。陸軍部隊の兵たちの船酔いも多くなり心配しました。

そんな中の二十一日、リンガエン湾に到着しました。ルソン島の中央部に位置するリンガエン湾はルソン海に面し、首都マニラの背後にある湾です。二十二日、第三輸送船団が一斉に上陸開始、海上から援護射撃が始まり、たちまちリンガエン

湾は戦場と化しました。リンガエン湾入口のサンフェルナド灯台を確保することが私達通信隊への命令でしたので、これが確保のため見張所長中居兵曹長以下七人が、TM式短波移動無線電信機や器材と食糧を上陸用舟艇に積み込み、灯台に向けて出発しました。

前方に真紅な火炎が上がりました。敵軍が石油タンクに火をつけて焦土戦術に出たのであろうかと思いましたが、灯台に到着しますと既に灯台は無人になっていたので、またもや無血上陸となりました。直に無線機を設置し見張所を設営し、活動を開始しました。

任務は、海上を監視して敵機、敵艦を発見すると直ちに無線機で通報することでした。僅かの人数での見張り立哨で、いつ何が現われるかわからないだけに無気味な毎日が続きました。その間に一次、二次の上陸作戦も終了し、私達の任務も終わり、二月早々には見張所を撤収し、次の作戦に移動しました。奥地からの情報では、上陸した

陸上部隊は破竹の勢いでマニラ目指して追撃中と
のことでした。

次の作戦命令がでて、我が隊は比島スピック湾
のオロンガホ港に到着し、第八十一特別根拠地隊
に編入され、私達電信員三人に暗号員二人が加わ
り、常塚三郎少尉指揮する陸戦隊員となりました。

第三南遣艦隊司令長官杉山中将が巡洋艦「琢磨」
に将旗を挙げました。我々常塚隊も「琢磨」に乗
艦、陸軍部隊と共同して上陸作戦に加わり、二月
二十七日ミンドロ島のカラパンへ上陸、ここでも
無血上陸、逃亡兵数人を捕まえた。この地で一カ
月間、警備しながら奥地へ進撃している第三十一
通信隊と連絡を取り合いました。

昭和十七年三月、ミンドロ島より第二駆逐隊「春
雨」「夕立」、敷設艦「八重山」の三隻に海軍常塚
陸戦隊は乗艦、私達電信員三人は駆逐艦「春雨」
に乗艦し、次なる作戦であるロンブロン島の敵海
軍基地に向って進撃しました。「春雨」「夕立」
「八重山」の主砲は戦闘配置に付きましたが、艦

上より見る限り敵兵の姿はなく、ここでも無血上
陸することが出来ました。

島の多い比島では敵軍も手が回りかねたのでし
ようが、この港は敵潜水艦の補給基地でもあった
ので、警備は厳重を極め、寸時も油断は許されま
せん。幸い敵襲もなく昭和十七年四月、一カ月間
の警備で撤収命令を受信し、敷設艦「八重山」で
オロンガホ港に帰着しました。

四月下旬、オロンガホ港より陸路トラックでバ
タン半島先端のコレヒドル島要塞向け追撃、コレ
ヒドル要塞の眼前にあるマリベレス岬に進行中、
戦後問題になりましたバターンの死の行軍の捕虜の
群を見ながら進みました。

だんだんコレヒドル要塞よりの攻撃が激しく
なり、最後のあがきを見せる敵の砲撃は我々の前
進を阻みました。前へ後へ右に左に砲弾が炸裂し、
その激しさはまさに一進一退、雨霰の砲弾の中で
やっとマリベレスの岬に陣を設け、電信所を設置
することが出来ました。

しかし連日昼夜の別なく砲弾の雨、我が陸軍部隊の打ち返す砲弾、要塞からの砲弾、その轟音のすさまじさ、大激戦の様子は筆筈に尽し難く、バターン半島のマリベレス岬の山々は蜂の巣の様相でした。

陣地も転々と移動せねばならず、山を掘って作った壕の中に陣地を設置しました。この激戦で日本軍も被害続出で多くの犠牲者が出ました。度々の陣地の移動のため心身共にくたくた、加えてマラリア病に罹り意識不明となりました。生死をさまようとはこんなことでしょうか、目を開けると「助かったぞ！」の大きな声がして、大きな注射が二本ぶら下がっていました。ここはどこですかと周囲の人に聞きますと「マニラの第一〇三海軍病院ですよ」と教えられびっくりしました。ここまで運搬されたことも何も知らず、あゝ命拾いましたと思わず神仏に手を合わせました。

コレヒドール要塞が陥落した五月七日は入院の翌日で、一日の差で任務を完遂すること出来ず残

念に思いました。第一〇三海軍病院で一カ月間治療後、六月中旬退院し第三十一通信隊に編入になりました。任務はコレヒドール要塞を巡視することで、あの熾烈な大砲の打ち合いを思い起し、堅固な地下要塞と巨大な要塞砲に驚き、死闘の激戦の跡をしのびました。

この巨砲で日本軍の犠牲者がどれほど多くたであろうかと思いましたが、一方、多数の米軍負傷者が地下壕内の病院で治療を受けている姿を見て驚きました。さすがに地下壕内にこんな立派なアメリカ軍の病院があらうとは予想もしていませんでした。そしてあの激戦で敵味方共多数の戦傷者が出ている、これが戦争だと、その悲惨さを身にしみて感じました。

昭和十七年六月下旬、マニラを出発してボルネオ島のバリックパンに到着しました。根拠地隊電信所には第五十七期の戦友十人が配属されており心強く感じましたが、二等水兵の哀しさ、毎夜整理ビンタとバツタ叩きの明け暮れに涙が出まし

た。食事も毎食、外米とカボチャに馬肉と同じ物で、野菜は自給栽培しましたが、それは先任水兵長や下士官に供し、私達二等水兵は食べられず、階級の厳しさを恨めしく思いました。

ある時、司令部主催の銃剣道大会が催され、私も剣道の部で出場しました。広瀬司令官や幕僚の前で私が六人を打ち負かし優勝し、二等水兵ながら天晴れと司令官賞を受賞したことがありました。

昭和十八年に入りますと、防空隊、月光戦闘機隊、水上機隊が進出して来ました。戦友も四人増加し、加えて五十七期生が揃って水兵長に進級し、通信隊は我々が中心になり、第二南遣艦隊旗艦系統の通信も多く交信することになりました。ボルネオ通信系、隊内通信、対機交信と重要な通信系統では第五十七期生が活躍しました。

この時期に司令長官として公卿華族の侯爵醍醐忠重中將が着任されました。そして司令官が第二十二特別根拠地隊の管轄区域巡視の折、私は随行電信員としてお供し、司令官の剛毅で気品ありお

くゆかしいお人柄にふれることが出来ました。同長官は第六艦隊司令長官で終戦を迎えられましたが、ボルネオで敵国人の密告により陰謀事件処罰の責任を問われ、戦犯として銃殺刑に処せられボルネオの地で生涯を閉じられました。

昭和十九年八月、私は第二十二特別根拠地附属第一〇六特別掃海艇電信員としてボルネオ水域船団護衛任務遂行中に第七十三期高等科練習所行きを命ぜられ帰ることになりました。

富井戦友と二人ガソリンと重油を積んだ「南海丸」に便乗し、八月八日バリックバン港を出港し、さらにスラバヤ・ビントアン島でボーキサイトを積み込み、昭南（シンガポール港）で船団を組み、九月六日内地向けて出航しました。

九月十二日未明、東シナ海の海南島東方水域でアメリカの潜水艦の攻撃を受け、「あつ」という間もなく沈没、重油やガソリンで火の海となった海に富井戦友と共に飛び込み、投げ込まれた竹の筏にすがりついて火の海をなんとか抜けることが出

来ました。しかし護衛艦が潜水艦めがけて投下する爆雷が海中で炸裂し、その破片で身体をえぐられ仲間が沈んで行く姿を見ましたがどうすることも出来ません。

私は富井戦友と励まし会って筏を握りしめ泳ぎ続けました。漂流して六時間ぐらい過ぎたころ、護衛駆逐艦「敷波」が眼前に見えました。「救助だ」と力を出して筏を漕ぎましたが、またもや敵潜水艦に駆逐艦「敷波」が攻撃を受け、たちまち轟沈、これまた「あつ」という間もなく姿を消してしまいました。ああこれで終わりかと無意識状態で筏につかまっていました。

早朝より海に飛び込み、朝飯も昼飯も水一滴も腹に入らず泳いでいる憐れな姿に戦争の悲惨さを感じました。とくに制空権も制海権もアメリカに握られている今、かつては昭和十六年十二月十七日、百六十四隻の船団と護衛艦隊がこの海を通ったことを思い起し、無念の涙が流れるのでした。

日没近くなってやっと護衛海防艦「御蔵」が救

助に来ました。あつ助だったと思いました。漂流すること十二時間、やっと助け上げられ甲板で応急処置を受けました。力尽きて意識の戻らない人達は、後部甲板より皆が手を合わせる中、水葬にされました。海軍の水兵であり、軍艦が軍艦らしく活躍出来なくなったことは残念でした。海防艦「御蔵」は海南島の三垂港に入港し、私たちは第二五四航空隊に仮入隊し、ここで手厚い手当を受けました。

九月十六日、海南島榆林港を出港する「浅香丸」に便乗して馬公沖を航行中、今度はアメリカ空軍機の空襲を受け「浅香丸」は航行不能になりました。幸い馬公軍港近くでしたから救助され、九月二十一日馬公地区隊高雄通信隊に仮入隊し一カ月電信当直に就きました。

昭和十九年十月三十一日、基隆港を出港する「明優丸」に便乗し、十一月六日門司港に到着しました。なんとボルネオを出発してから三カ月後の十一月九日に久里浜通信学校に到着することが出来

たのです。

同期の三品戦友は先着しており、私と高井戦友を迎えて、身の回り品を提供してくれました。嬉しかったですね。その感激と共に戦友の暖かい心使いを今でも忘れることが出来ません。死線をさ迷うこと二回、大切な書類も紛失し、通信学校では第七十三期卒業の携帯歴亡失のため、即日舞鶴通信隊行きを命ぜられ舞鶴に向いました。久方ぶりの舞鶴海兵団でした。

十二月二十日、第七十四期高等科練習生として入校、対機交信班に編入され、夜間は交替で防空壕掘り、昼間は久里浜市内の警備もしました。

昭和十六年三月、久里浜通信学校に入学した時と社会状況は変わり、日本本土でも全国各地で空襲を受けており、日本の将来に不安を感じるようになりました。南方にいたころは、進撃々々で何としても勝たねばと頑張ってきましたが、度重なる我が身が受けた悲劇を思うにつけ一層不安を感じました。

昭和二十年四月五日、高等科練習生も繰り上げ卒業となり、滋賀航空隊付きを命ぜられました。ここでは教員兼甲板下士官として防空通信学校出身の甲飛、乙飛、定員電信員の教育訓練に努めました。

七月三十日、滋賀航空隊が米軍機の空襲を受けました。全員を避難させようと兵舎を巡回中に機銃掃射を受けましたが、運良く難を逃れることが出来ました。全国各地でも連日空爆、機銃掃射が激しくなり、多くの死亡者や負傷者が出ていました。南方に残った人達はどのような状況であらうか、私は軍の命令とはいえ、早く内地に帰れたことを申し訳なく思ったものです。

八月六日早朝、広島に新型爆弾が投下され、多くの人が死亡されたとの噂が聞かれました。そして八月九日長崎にも新型爆弾が投下されました。ソ連が日ソ中立条約を一方的に破棄し、満州国に怒涛のごとく進撃したとの報道もあり、いよいよ日本の敗北かとも思いました。

八月十五日、終戦の玉音放送を聴き、無念の涙を流す一方、これでよかったとも思いました。第一線で戦っている人達も、内地の方々も長引けば長引くほど犠牲者は増加するばかり、終戦になってよかつたと思いました。終戦による軍隊の残務整理中にも、フィリピンのコレヒドール要塞の大激戦、「南海丸」が沈没し火の海に飛び込んだこと、駆逐艦「敷波」の轟沈した姿、十二時間漂流した時の苦しかったことなどが頭の中を駆け巡り、今日元気で終戦を迎えることが出来たのも尊い命を投げ捨て日本の国を守ってくれた人々のお陰だと生死をさまよった私には一番有り難く思いました。十月軍務を解除され、七尾市の我が家に帰りますと、母親が泣いて喜んでくれました。父も妹も死亡し、兄も戦死したと聞き、仏壇の前で、私が元気で帰れたのも神仏のご守護のお陰と泣きました。

後日調査して判明したことは、フィリピンに投入された陸海軍兵力約六十三万人のうち戦死した

兵士は五十一万八千人で、比島作戦の激戦を物語っています。そしてボルネオ島で処刑された醍醐中将ほか多くの将官たちの名簿を見て、その方々の無念さを思い、人間が人間を殺す戦争の悲惨さを思い知らされました。

現在、私は八十六歳、老骨に鞭打ち戦争の悲劇を繰り返してはならないと、小学校や種々の場所で私の体験を語り伝えております。このことが尊い命を捧げて日本を守ってくれた人達への供養と思つて一生懸命頑張っております。